

災害に向き合う教育の可能性 ～防災の視点を超えて～
震災直後の復興教育実践の視点から

【はじめに／本日報告する内容】

・東日本大震災後の石巻市立雄勝小学校において、私が取り組んだ復興教育すなわち被災児の「心のケア」では、これまでの教育実践が通用しないという事態に直面し、**子ども理解の大転換**を迫られました。

・その子ども理解の転換から生まれた**被災児の「心のケア」の授業実践**は、現在大きな社会問題となっている**不登校の子ども**の「心の傷」を癒す教育実践として、何かのヒントを提案できるのではないかと考えました。

きっかけ・出会い

- ・広木克行先生の著作「不登校の『心の傷』が癒えるとは」
- ・「2026年6月20日教科研プレ集会」のオンラインで坂本則子さんの講演を視聴
坂本さんの著作「我が子が不登校という問い」

徳水 博志（とくみずひろし）

一般社団法人雄勝花物語共同代表（元石巻市立雄勝小学校教諭）

e-mail : hirotoku3920@voice.ocn.ne.jp

宮城県 石巻市雄勝町の紹介

石巻市の北東部に位置する港町、2005年の広域合併で石巻市の一部



2011年3月東北地方太平洋沖地震津波で壊滅した雄勝町中心部



破壊された雄勝町中心部



雄勝公民館の大型バス



市立雄勝病院(入院患者40名, 医療スタッフ24名死亡)

2023年3月11日NHKスペシャルで放映



自宅跡



屋上に民家が流れ着いた雄勝小学校



破壊された雄勝小学校



校舎の裏側



2階の4年生教室



2011年4月21日から隣町の河北中学校の空教室で学校再開



教科書、ノートは支給品、教科書と板書のための座学の授業が始まる(2年間)
全家庭が町外に避難したために、子どもの数は震災前108名から41名に激減

給食(4, 5月はパンと牛乳のみ)

2つの給食センターもすべて流されて正規の給食は1年間再開できず



ただし雄勝中学校と雄勝小学校は、民間団体のスイート・トリートから給食の支援を1年間受けることができた。



子どもたちは避難所(体育館などに雑魚寝)から通学

震災後 1 年目の子どもたちの様子（異常行動）

- ・ 全員が自宅を流され避難所から通学（雑魚寝, 食料不足, 家族の死）

1. 低中学年

- ・ 活動意欲なし、トイレに一人で行けない
- ・ **大雨を怖がる**（津波連想）
- ・ 親、教師から離れない → **赤ちゃん返り**

2. 高学年

① 異常なテンションの高さ、際限なしのおしゃべりという異常行動

- ・ 急性ストレス障害（ASD）の「**過覚醒**」状態
- ・ トラブル続出、**消えろ！どけ！殺すぞ！**

② 数か月経っても改善はなし

- ・ 雄勝に行けない子 → 心的外傷後ストレス障害（PTSD）の**回避**
- ・ 学習意欲の消失、授業は20分が限度、教科指導に見向きもしない、学ぶ意味を喪失した子どもたち、将来に投げやり、
- ・ 全校児童108名 → 40名に激減
- ・ 不登校3名、内陸部の転校先でも不登校

どの学級も授業不成立（学級崩壊）状態！

震災後の教育行政と被災児とのミスマッチ

*震災直後の教育委員会は機能不全、各学校では暗中模索のなか、教職員が中心になり避難所運営し、数々のドラマが生まれる。「子どもにとって何が最善か」、これが学校運営の判断基準となった。その後、行政による**学校正常化と学力向上策**が始まる。

教育行政・学校

1. 震災前の教育課程の復旧を目指す

- ・学校正常化、時数確保、土日授業
- ・被災校でも指導主事訪問が復活
- ・「復興には学力が必要だ！」
⇒心のケアから「学力向上」へ変化

2. 学校統廃合を進める

- ・6月雄勝小は学級減の提示
- ・10月市教委:被災校の**学校統廃合**の提案

3. 被災者に向き合わない

被災児

- ・自宅なし、避難所から通学
心にトラウマ、喪失感
- ・校舎なし、教室なし、教材用具なし、地域なし、地域教材なし、**教育課程の実施が不可能な状態**

保護者・住民

- ・地域復興に学校再建は不可欠、**学校が無くなれば地域消滅**

- ・大川小学校事故への責任回避、石巻市長「自然災害の宿命」

ミスマッチ

・なぜ**ミスマッチ**が起きるのか。復興には学力が必要だという論理で、学力競争の世界に子どもたちを連れ戻した。子どもを**ケアすべき対象**として見ていない、**経済活動の人材**として見ている。ここに**ミスマッチ**を起こす根本要因がある⇒被災校での子どもの荒れ、学級崩壊、不登校児童生徒の急増へつながっていく。

学校教育と子どもの**ミスマッチ**から生じる 小・中学生**不登校**35万人

○東日本大震災以後（2011年～）

- ・2015年～19年（5年連続）
- ・宮城県の中学生**不登校率全国1位**

復興には学力向上が必要だ
という方針の下での「学力
向上」策と子どもとの**ミス
マッチ**

○コロナ禍以後（2020年～）

- ・2020年春の一斉休校
- ・全国の小中学校の**不登校が急増**

学習の遅れを取り戻すとい
う方針の下、学力テスト体
制を強化した学校教育と子
どもとの**ミスマッチ**

・コロナ禍以後の学校においても、東日本大震災以後の学校と**同じ構図**が繰り返されている。楽しい学校、分かる授業から能力主義教育の方針の下、**経済活動のための人材育成を目的に**、学力テスト体制を強化してしまったゆえに、**子どもとの間にミスマッチが生じた**と理解することができる。

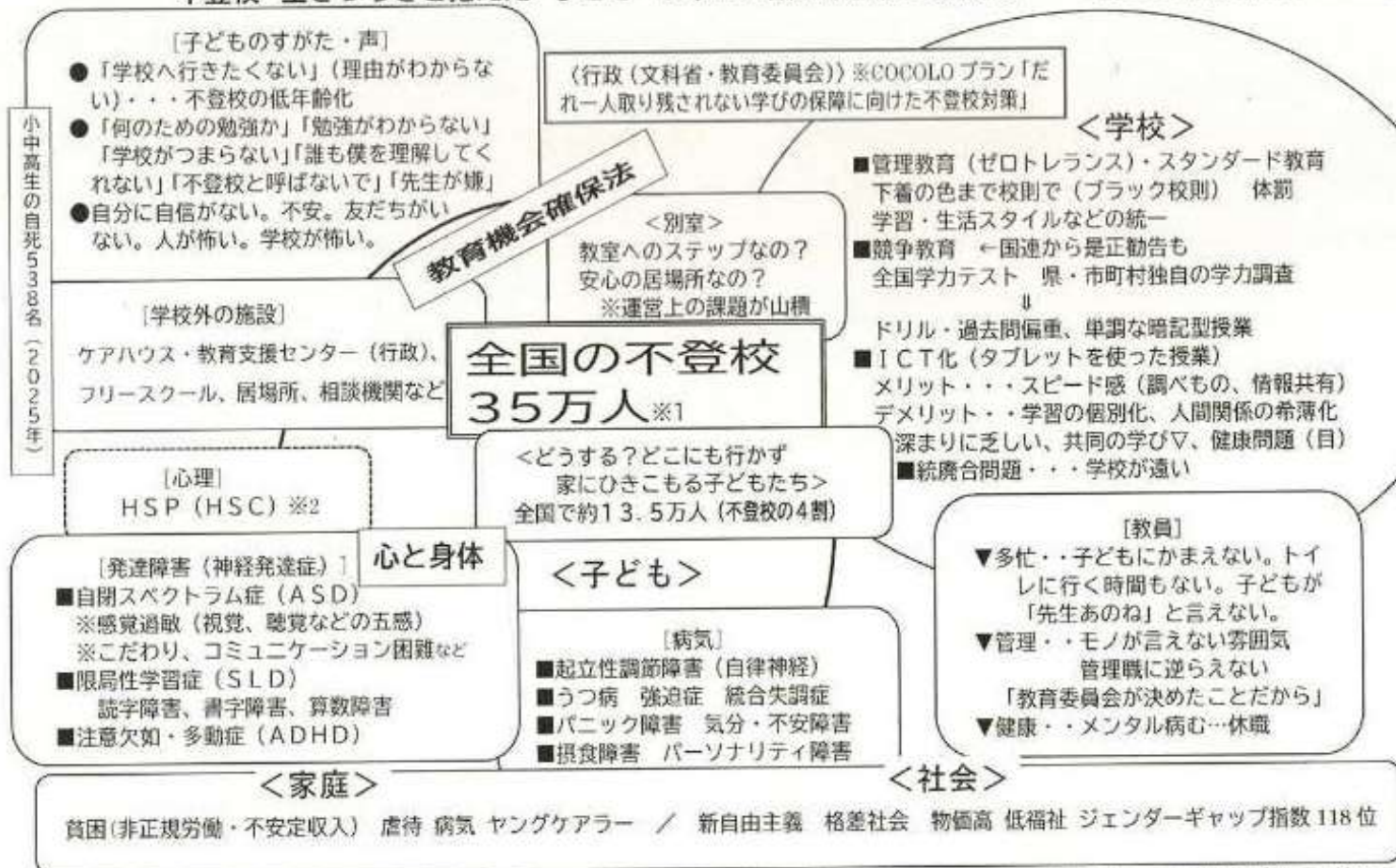
・学校という空間に、子どもたちは息苦しさ・緊張・心配・不安・恐怖などの感情を抱え、耐えきれなくなり限界を超えた結果に、不登校やいじめや自死に向かうと理解できる。

【不登校や生きづらさを抱えた“子ども”を中心に据えた社会の俯瞰図】

人間と教育130号（みやぎ教育相談センター所長 瀬成田実さん作）

不登校・生きづらさを抱えた“子ども”を中心に据えた社会の俯瞰図

20250215 瀬成田作成（20260322 改訂）



※1 2024年度の全国の小中学校における年間30日以上欠席者数。35万3970人。全体の3.9%。1クラスに1人の計算。このほかに高校生の不登校7万弱

※2 HSP（HSC）…Highly Sensitive Person（Child）の略。生まれつき非常に繊細な人（子ども）。敏感な気質を持つ人。

* 自由のない今の子どもたちの辛さを表現した絵画

* 自画像と言われている。



1993年 飛べなくなった人 石田徹也

* NHKEテレ日曜日美術館で3回取り上げられた。
スペイン、アメリカでも展示会が開催された。

辛さに苦しむ子どもたちの姿を表現した絵画

*自画像と言われている



1999年 囚人 石田徹也

学校という刑務所に閉じ込められた子どもたちは、校庭に出ても向き合うことはなく、孤立し、直立し、遊ぶことも知らない。

【不登校の理論的実践書と体験記との出会い】

・「不登校の『心の傷』が癒えるとは」 広木克行著2025年

・「わが子が不登校という問い」 坂本則子著2025年



・「不登校とは、幼少期の子どもから遊びと育ちを奪う中学受験など、過度な学力競争と「よい子」競争によって心が傷ついた子どもの姿です。」

—著書の「はじめ」から引用

・不登校は心の傷(心的外傷/トラウマ)によるという子ども理解の転換

・不登校35万人は「災害級」の問題と捉える視点

*2025年みやぎ教育文化研究センター発行「センター通信」120号の広木氏の講演記録も同趣旨の内容である。



・不登校を「心の傷」(トラウマ)と理解する著者に納得した。震災後に被災児の心のケアに取り組んだ、私の復興教育の授業実践と共通点が多々あり、不登校の子どもへの心のケアに、私の実践が何かの役に立つのではないかと思わされた。特に「震災体験の対象化と意味づけ」というケア的教育実践が役立つのではないかと思わされた。



・2026年6月20日 教科研プレ集会のオンラインで坂本講演を視聴

・京都市の中学校教師の坂本則子さんが、我が子二人とも不登校になったために、休職して子どもと向き合い、子どもが前を向いて歩み始めるまでの親と子の再生の記録。現場に復帰した坂本さんは、中学校の教育相談部長として不登校支援を行ってきた。



坂本さんの再生の記録は、震災から受けた絶望から前を向くようになった私自身の自己再生とダブるものがあった。さらに坂本さんが我が子と苦闘された記録と復帰された中学校で子どもと向き合った教育実践は、私が被災児の心のケアに取り組んだ際の五里霧中のさなか、手探りで実践を生み出していった私の苦闘とダブるものがあり、坂本さんに大いに共感すると共に大きな励ましをいただいた。

【教師・保護者・カウンセラーの皆さんへ】

・不登校の子どもの心のケアと学び直しの保障に、筆者の復興教育の「心のケア」の授業実践を生かすことができるのではないかと仮説のようなものを提案させていただきます。「学びの多様化学校」やフリースクール等の皆さんへも

筆者の【復興教育】 被災児の心のケアの授業実践

(1)被災児の“荒れ”異常行動をどのように理解したのか。

・生徒指導上の問題行動、不適応との見方は誤り。

・震災がらみの病理(トラウマ・グリーフ)という子ども理解に転換

(2)教育課程をどのように転換し、どのような教育課程を編成したのか。

・被災地の復興を担う教育への転換

・子どもの願いや発達上の要求から設定した学習内容

(3)「心のケア」の授業実践は、具体的にはどのように行ったのか。

①安全安心の確保と親子の関係の回復

②辛さに共感できる学級集団での語り合い

③震災体験の対象化と意味づけ

④地域復興を学び参加することで、地域とのつながりを回復し、前を向く力を獲得

キーワード：震災体験の対象化と意味づけ、
つながり(関係性)の回復・再構築

スライド

不登校の子どもの教育 「心のケア」と「学び直し」の保障

(1)不登校の子どものように理解すればいいのか。

・弱い子や甘えという見方は誤り。文科省・教師・親は、現在の子ども理解からの転換が必要。

→「心の傷(トラウマ)」という理解への転換が必要(広木克行先生)

(2)能力主義的競争教育と管理主義をどのような教育課程に転換すればいいのか。

・子どもの成長と発達の権利を保障する人間教育へ転換

(3)不登校の子どもの心のケアの教育実践は具体的にはどうあればいいのか。

①親の役割/「ケアの心」は子ども中心(広木先生の著作に詳しく例示されている)

【私からの提案】

→②辛さに共感できる仲間との出会い(広木先生)

→③不登校体験を対象化し意味づける学びの場の提供

→④能力主義的教育の価値と人間関係を相対化し、多様な生き方や人間尊重の価値観に触れる学び直し(価値観の再構成)の場の提供

震災後の教育行政と被災児との**ミスマッチ**
被災児と被災地に寄り添わない教育行政に大きな疑問！

子どもの願い（発達・成長への要求）

- ① 被災児は内面に抱える“**喪失感や辛さ**”の**解決（心のケア）**を求めている。
- ② 避難所で中学生が働く姿。**何か役割を担いたい子どもたち**。民間団体のアンケートでは、被災地の**70%以上の子どもが地域の復興に参加したい**。
* 雄勝小では**90%**

住民の要求

- ① 安全・安心な場所で自宅を再建し子どもたちを安心させたい（心の癒し）。
- ② 地域から学校が消えると、地域は消滅の危機を迎えるので、地域住民は学校統廃合に反対し、地域を持続可能なまちとして復興させたい。



その願いに応えていく「教育課程」の構築が必要！

子どもの願いと地域の要求から立ち上げた教育課程

雄勝小学校の「復興教育」

2011年6月提案⇒2学期(8月末)から正規の教育課程として実施

雄勝小学校の《復興教育》の方針

被災地の復興を担う教育への転換

- 1、〈子どもは地域の宝〉という**子ども観への転換**
- 2、故郷を愛し、故郷を復興**する社会参加の学力**という**学力観への転換**
- 3、地域の復興なくして、学校の再生なしという**地域復興に貢献する学校経営観への転換**

教育課程に「復興教育」の内容を追加

①地域復興を学び、社会参加する活動（間接的な心のケア）

・地域とは子どもたちの人格の一部である。アイデンティティーとしての地域の復興に対して、雄勝小の90%の**子どもが参加したい**と願っている。その要求にこたえる学び。⇒**地域とつながり直す(心のケア)**

②震災と向き合い、意味づける学び（被災児の心のケア）

・被災して喪失感や将来への不安を抱えている子ども達に苦悩を語らせ、**震災と 折り合いをつけて、震災を人生の一部として引き受けて、前を向く力を育てる学び (心のケア)**

・目の前の子どもの願いと被災地の現実から出発し、子どもにとって幸せとは何かと発想したところから生まれた**人間教育である**。産業界の要請する現在の能力主義的な人材教育とは対極。現在の学校の人材教育は子どもたちの目を地域からそらす**「村を捨てる教育」**とし機能し、被災地の復興に寄与したいという子どもたちの願いと一致しなくなる。

震災2年目の子どもの実態（5年生）

2012年隣町の中学校の空き教室を間借りしての授業再開の2年目、5年生9名を担当した。昨年の4年生時は、他の学年同様に授業が不成立であった学級であったが、私は自信を持って学級担任を引き受けた。これまでも様々な手立てによって荒れた学級を立て直してきた自信があった（生活指導と教科指導：国語文学の授業・算数指導・美術教育・総合学習）。ところが、6月に行っても7月に入っても手ごたえがなく、子どもが変容してこないという事態に直面したのである。

震災2年目に、子どもたちの“新たな荒れ”に直面する！

- ・授業は20分が限度、学習嫌い、集中力と意欲の低下、投げやり、目標の喪失
- ・殺すぞ！死ぬ！消えろ！ 暴言を吐く子、トラブル、いじめの顕在化
- ・異常なテンションの高さ、イライラ、しゃべり続ける、奇声、はしゃぐ、授業中の私語や休憩中のしゃべりを抑えられない（不安や恐怖）、異常な覚醒興奮状態（過覚醒）

【荒れの要因】

①震災の直接の影響：急性ストレス障害(ASD) → 2年目心的外傷後ストレス障害(PTSDの回避)の疑いの子も存在

②震災後の生活環境の激変：自宅流出による避難所 → 狭小の仮設住宅暮らし、我慢の生活、壊滅した地域の喪失、19名中10名の転校による人間関係の喪失、間借り教室で校庭と体育館を使えない不自由さ → ストレスの蓄積

これまでの教育実践が通用しない事態に直面！

筆者も被災者、ストレスで7月下旬から持病が悪化し病休1ヵ月

子ども理解の転換の必要性に気づく

○繰り返すが、これまで積み上げてきた教科指導等が全く通用しない子ども達であった。考えさせる授業を行うと「頭が痛い！」と机に顔をうずめる子ども達。授業は20分が限度。教師の指示や指導を入れても5年生の行動は全く改善せず、同じ行動を繰り返す。それはなぜかという疑問が生じてきた。しかし方策は見つからない。

○教師にとって一番つらい事は子どもがこちらを向いてくれないこと。教師が提示した教材に子どもが食いついて教師と向き合って、教材を用いた「教えと学び」の「応答の関係性」を作れないことである。

・私の教師生活を振り返ると、指導が有効であったときの実践は、子ども理解が的を得ていたからである。子どもたちが荒れる要因を探り、内面の要求を探り、言葉で表現させて、要求を実現させる方向に、生活指導と教科指導を組み直し、学びの世界に導き、子ども自身が”分かった、楽しい”という学びの体験を積み重ねて行った結果として、荒れを克服してきた。そこに自信をもって子どもに臨んが、その自信が見事に打ち砕かれてしまったのである。

○1学期間は教師生活で味わう初めての危機！教室に行く足取りが重くなっていることに気付く。学級崩壊に至った教師の思いが分かったような気がした。しかし、子ども達は教師の私の指示や要求に反発してはいないし、無視もしてもない。コミュニケーションは成立している。学級崩壊とは何かが違う。それが分からない！それを探る必要があった。しかし体力と気力は限界を超えて、持病が悪化し、1学級終了と同時に1か月の入院となった。病室で休みながら、次のようなことを考えていった。病室で考察したこと。➡

○子どもの問題行動は、これまでの範疇でとらえてはいけない。別角度から理解する必要がある。

- ・被災児が起こす問題行動は、学習指導方法の改善の問題ではない。
- ・また望ましい道徳性やモラルから逸脱した行為として矯正の対象にし、学校生活や集団生活に適応させることを目的とした生徒指導上の問題でもない。

子どもたちの姿は、教師生活で”これまでに見たことがない異常な姿”を見せている。明らかに何かが異常な子ども達であり、子どもの”心が何かに囚われている状態”、学習以前に身体的・生理的に授業を受け付けられないという状態に見えた。 ➡子ども理解の転換の必要性に気づく

教師生活で今までに見たことのない子どもの姿

- 何かが異常な子ども達であり、子どもの“心が何かに囚われている状態”、学習以前に身体的・生理的に授業を受け付けられないという状態とは、子どもたちは内面に抱える喪失感、悲しみ、不安、恐怖、イライラ等を忘れるために、その内面に抱える苦悩から逃れるためにテンションが高くなり、過覚醒となっているのではないか。

子ども理解の転換

目の前の子どもたちは、千年に1回の大災害を体験した子どもであり、**震災がらみの何かの病理を発症しているのではないか。**

- 子どもたちは心に抱える喪失感、悲しみ、不安、恐怖、イライラ等を言葉にできずに、対象化できず、表現できず、ただ不安感やイライラが襲ってきて、自分でどうすることもできないために、声を張り上げてしゃべり、はしゃぎ、暴言を吐くことで、逃れようとしているのではないか。つまり目の前の子どもたちは千年に1回の大災害を体験した子どもたちであり、**震災がらみの何かの病理を発症しているのではないか**と子ども理解を転換した。

● 広木先生の不登校は「心の傷/心的外傷」という子ども理解と一致

仮説の設定

震災がらみの病理(トラウマ・グリーフ)を癒すケア的教育実践を行えば、前を向く力を得て、学習意欲の回復と生活意欲が回復するのではないか。

- **震災がらみの病理を癒す「ケア的教育実践」**を行えば、子どもが心に抱える問題が解決され、前を向く力を得て、学習意欲や生活意欲が回復し、否定的に見える問題行動も解決できるのではないかと考えた。
- ただし子どもたちが**震災がらみの何かの病理を発症している**のであれば、教育の対象だけではなくてカウンセラーや医師の診療の対象として捉える視点が必要となる。

震災がらみの病理(トラウマ・グリーフ)を癒すケア的教育実践とは？

○子どもの現実

- ・震災前の世界には絶対に戻れない、世界が違って見えている。＊学校だけ元に戻しても？
- ・泣いても叫んでも最終的には現実を受け入れるしかない！ ＊親や兄弟を亡くした子

○教師の願い

- ・「震災で私の人生は狂ったと考える子にはなってほしくない」

○被災児が求めている学びとは？

- ・子どもが抱えるトラウマやグリーフを解決してくれて前を向くことに結びつく学び
- ・震災を人生の一部として引き受けて、人生の物語を新しく描き直すような学び
- ・震災をただの不幸な体験にしない、プラスに転化する学び

○ケア的教育実践の方針

- ・教室内を安全安心な場所とし、自由にものが言える学級集団を築く。
- ・子どもに寄り添って心の不安・叫び・恐怖・悲嘆などの感情を聞き取り、受け止め、表現させ、意味づけさせること。 ➡「震災体験の対象化と意味づける学び」

「震災体験の対象化と意味づける学び」が必要

- ・文芸教育研究協議会の西郷竹彦会長の文芸学から学んだ「意味づけ」を応用。
- ・心理学用語では【意味の再構成】と言われる。 ・ロゴセラピーの立場では、「人間は人生の目的や生きる意味を見出したり、創造したりする欲求をもっており、それ故に、どのような体験にも何かの意味を探りだそうとする存在である」とする。ロゴセラピーとは、アウシュビッツ収容所の体験記録 日本語訳「夜と霧」の作者ビクトール・フランクルが提唱した実存的な心理療法。日本カウンセリング協会でもリモートも含めて4回講演を行った際に、日本ロゴセラピー協会の福井みどり先生から、本実践はロゴセラピーだと評価された。

教育課程上の【復興教育】は

2本柱 (時数：総合・教科で確保)

①地域復興を学び、社会参加する活動 (間接的な心のケア)

【6年総合学習单元名】
・雄勝硯と町の復興について
考えよう (2011年)
時数：総合・社会科

【5年総合学習单元名】
・雄勝ホタテ養殖と漁業の復興について調べよう
(2012年)
時数：総合・社会科・理科

②震災と向き合い、意味づける学び (直接的な心のケア)

【5年総合学習单元名】
・震災体験を記録しよう
(2012年)
時数：総合・国語科・図工科

本日報告

②【震災体験の対象化と意味づけ】の実践

5年生総合学習：震災体験を記録しよう

・学習のねらい：震災の記憶と向き合うことで、現実を受け入れて心を整理し、震災と折り合いをつけて、前を向く意思と希望をはぐくむ。

・教師側の指導上の課題：子どもの内面をどのように理解するか、そして前例のない震災体験の「対象化」と「意味づけの力」を育てることに挑戦する。

＊私と子ども、子ども同士も同じ地平にいる被災者。辛さを分かり合える間柄であり、自由にものが言える関係はできていた。これが前提条件である。

2012年9月～2013年3月

- ・震災体験の俳句
- ・震災体験の作文

言語表現

・朗読劇「故郷復興へ」

・絵本制作

立体表現

・ジオラマ制作

・私の宝物

絵画・言語表現

・木版画共同制作「希望の船」・感想文

＊教育行政の方針は震災には触れないようにすること。そして学力向上を目指すことであつたので、震災と向き合わせる授業を行った教師は宮城県内で教職員組合を中心に1桁の教師のみ。圧倒的多数の教員は学級崩壊のさ中で、学力向上に疑問を抱きつつ暗中模索の日々を送った。

本日紹介

導入：女川一中の佐藤敏郎先生の国語の授業から生まれた俳句を紹介。
見上げれば ガレキの上に こいのぼり
夢だけは 壊せなかった 大震災
特に抵抗感なし。震災に触れるかどうかは自由とした。

【五七五の俳句の授業】 2012年9月

○震災と向き合った俳句

雄勝小 あの日経験したこと わすれない
あの人に 言えばよかった ありがとう
ひなんじよで えがおを見れた うれしいな
食べ物は のこしちゃいけない 大切な物

○震災と向き合えない俳句（PTSDの疑いの子）

運動会 ことしは赤が 勝ちました
今日の日 は プールだやった うれしいな

実践の結果：俳句づくり、読み合わせ、感想の発表（2時間）を通して、震災とゆるやかに向き合わせた。

・特に拒否反応はないと判断して、震災作文を書くことを提案した。俳句作りでは震災と向き合えなかった子2名も作文を書いている。

国語の震災作文の授業

2012年9月

被災体験を作文で書くことで、内面を見つめる自己対象化と意味づける力を育てる。作文を読み合い、被災体験を語り合い、聞き合うことで、他者の目でも意味づける力を育てる。(西郷文芸における虚構の作文指導)
 ・時数：作文2時間、読み合わせ4時間、親の手紙読み1時間、合計7時間

三・一一東日本大震災の記録

五年 男子 龍司

三月二一日、ぼくは地震になる前にヤマテル*にいました。 *本屋さん

ぼくは公衆電話でおいさんに電話したら、その時は電話に出なかったから、お母さんに電話をかけたら、出てくれました。

「お母さん。おいさんが電話に出てくれなかったから、おいさんにむかえに来てと言つて。」と言つたら、「うん、わかった。」

と言われて、電話を切りました。そして、おいさんがすぐ近くまで来たときに、急に大きな地震が鳴りました。おいさんに、

「車に乗れ。」

と言われて、車に乗ると、

「家に行くぞ。」と言われて、家に着きました。

家に着くと、

「津波だー！にげろー！」

と言われて、山ににげようとしたら、犬をわすれていたと思つて、家にもどりました。そして、すぐ津波がやってきて、犬といっしょに走つてにげました。やつとの思いで、やつと山に着きました。そして、山から水浜保育所にひなんしました。

ぼくは、あつそつ言え、お父さんとお母さんとお姉ちゃんはいじょうぶがなと思ひました。

そして、いっしゅん思ひ出したのが、お母さんの「うん、わかった」という言葉でした。ああ、うんわかつたが最後の言葉となつたのかなあと思ひました。

朝五時、ぼくはお母さんとお姉ちゃんとお父さんの三人をさがしに行きました。そしたら、いっばいがれきがありました。犬をだきかかえて十分くらいしてから、やつと車屋の所に行きました。すると茶色の頭が見えました。あれはお父さんじゃないかなと思ひました。すると本当にお父さんでした。

「ねえ、お母さんとお姉ちゃんいたの？」

と聞いたら、「うん、いたよ。クリーンセンターにいるよ」

と言われました。クリーンセンターに行くと、お母さんとお姉ちゃんがいました。みんなに会えてよかつたです。

あの時、おいさんが車に乗れと言われた時に乗らなかったなら、ぼくはこの世にいなかったかもしれないです。(2012年9月10日)

家族が死んだかもしれないという境遇を一晚体験したこと。おいさんの車に乗らなかったら、ぼくはこの世にいなかったかもしれないという心境を十歳の子が体験した事実は非常に重たい。この子は今後、震災体験の意味をどのように問う力を身に付け、どのように意味づけたのだろうか。後述する版画の感想文で紹介します。

読みの交流：発問1気づいたことを発表しよう。→C：家族を心配しているところが3か所あり、優しいです。C「最後のことばとなつたのかな」では、お母さんの死を覚悟して一晚中辛かつたと思ひます。発問2：同じ家族への優しさが繰り返されている行動があるがどこでしょうか。C朝5時に家族を探しに行ったところ。この行動は「親が心配でたまらなくなり朝5時から瓦礫の中を泣きながら絶望しながら探した(同化体験)」と思うが、他者から見る(異化)と親への強い愛から出た行為と意味づけた。C：犬を助けにもどつたところも同じです。すごいです。ペットの犬は龍司にとって大切な家族。津波が来る直前に犬を助けにもどつた行為は危険な行動だが恐さを忘れて夢中で助けに帰つたと思われる。しかし、龍司にとっては「当たり前」ではなかったかと意味づけられる。つまりいざというときには家族のために命懸けで行動する気概を俺は持っているんだと自己認識を変革したのではないだろうか。(虚構の作文指導)

一年半がたった今

五年 女子 K 子

震災から一年半がたちました。私のふるさとの石巻市雄勝町は、今でもがれきの山がたくさんあります。私の家があった場所にも、がれきの山やコンクリートの山があります。あの三月十一日の大震災は、**何と言っても忘れられない日です。**

あの時、私は家にいて、宿題をやるうとしていました。ランドセルから宿題を出したその時、地震が起きました。ゴオオー！ガタガターと聞こえたので、すぐにテーブルの下にかくれました。地震は二、三分、いやもつとかもしれない。長い時間、大きいゆれが続きました。地震がおさまって有線放送から大津波警報が出されました。

私はお母さんとすぐに車で大おばさんをむかえに行つて、その後、学校まで、お姉ちゃんをむかえに行きました。そして、船戸の山に逃げました。何分かつた時、「津波だ！津波が来たぞ！」という声が聞こえたので、すぐ車をおりて山に登りました。

山から私が見た光景は、とんでもない光景でした。もう今までのにぎやかな雄勝の町は黒色の海にのまれていました。**私はその光景を見るのが一番つらかったです。**山に逃げた私達は地区の人達と雄勝火そう場に集まって津波がひくまでひなしました。

その三日後にお父さんがむかえに来てくれました。私はすごくうれしかったです。お母さんといっしょに、「帰つて来てくれて、よかったね。」と言いました。

その後は河北町のいこの家に移つて、住まわせてもらっています。今でも家族四人で住んでいます。

私には今、「ありがとう」を伝えたい人がいます。いとこの家族のみなさんです。

そして、お父さんとお母さんにも「ありがとう」を伝えたいです。ボランティアの方や支援をして下さった方、がれきてつきよをして下さっている方にも伝えたいです。そして、NHKの「みんなの歌」を作つて下さった渡辺なつみさんなど、たくさんの人に「ありがとう」を伝えたいです。

私はもつと雄勝で思い出を残したかったです。でも、ずっと悲しんでいてもだめだと思います。ですから、いま校舎を借りている河北中学校さんにも感謝しながら元気に過ごしたいです。(2012年9月10日)

●母親によると、5年生のこの作文によって初めて震災の体験を家族に話すようになったそうである。それまでは震災に触れることを嫌がっていたそうである。そのため雄勝に行くことがまだ出来なくて、家族で行動する場合は、この子だけを家に置いて雄勝に行くようにしているということであった。PTSDの「回避」の疑いがあると思うが、医者には掛かっていないそうである。この作文では自分の故郷にどれだけ強い愛着があったのかが分かつるとともに、その故郷が津波で流されて破壊されていく様を山の上から見ていた時の自分が受けた衝撃、辛さ、悲しみという感情を対象化し、ことばで表現することができている。少しずつ震災の記憶と向き合つて、心を整理し始めている段階であるというように、子どもを理解することができる。この子の作文に対して、母親が手紙を書いたのを紹介する。

親から我が子へ手紙を書いていただく

〇〇へ

東日本大震災から一年と六か月、時間がいつばいたっているような気もするし、あの日のまま時間が止まっているような気がします。

自然の力はすごいよね。大地震と大津波は、誰のせいでもないのだけれど、お母さんは現実なんだけど、いまだにこの現状が信じられない時があります。

震災の作文を去年は思い出さくれないから書けないと言っていたけど、
今年は書き上げた〇〇、えらかったね。いやだと言っていたので、震災の時の〇〇の気持ち、話すこと、聞くこともせず過ごしてしまったので、
〇〇の気持ちが分かって少しうれしかったです。

〇〇の大切なものがたくさんあった家が、大好きな雄勝の町が、あの
大津波で一瞬になくなってしまつて、本当に、本当に辛かったよね。お父
さんは無事なんだろうかと、これからの生活はどうなるんだろうかと
か、いっぱい不安にさせたよね。

お父さんが無事にかえつて来てくれた時、「生きてくれたことうれしく
て、みんなが見てたけど、家族で抱き合つて喜んだよね。いとこの家に住
まわせてもらつて、家がある、電気がつく、水道が出る、普通の生活ができ
る、家族みんなで暮らせる、今まで当たり前だった事ができるって、素晴
らしいと感じたよね。その事が、たくさんの方々に、支援をしてくださつ
た方々に感謝するにつながつているのかなと思います。

「感謝」、どうすればこの気持ちを伝える事ができるか、一緒に考えてい
こうね。

「感謝」、この気持ちを忘れないでいこうね。

「感謝」、〇〇に感謝です。〇〇と同じ気持ちです。たくさんの方々に
感謝です。

お母さんは、〇〇が生きていてくれて、元気に過ごしてくるから今
があります。あの大地震、大津波は忘れたくても忘れることができない出
来事です。〇〇もお母さんも生かされた者の一人です。津波で亡くなつ
た方々に恥じないように、今を大切に過ごしてください。お母さんは〇〇
を不安にばかりさせてしまつたけど、お母さんも〇〇に負けないように
全力で今を大切に過ごします。一緒に前に、前に、進もうね!!

〇〇の笑顔が大好きです。

お母さんより

被災した親は家も財産もすべて失ったからこそ、**素の自分**に戻り、命が助かった我が子へ、**ただただ無条件の愛を抱く**ようになったことが書かれています。**この手紙を読み直してみて、坂本則子さんの体験との共通点に気付かされました。**坂本則子著『我が子が不登校という問い』p69～72, P120「**髪の毛なんかなくなつたってもいいやん！何もなくなつてもいいわ。この子は何もなくなつてもこの子やわ。この子は生きている！**」という気持ちが湧き上がってきました。」——この意識は被災者が体験した意識と同じ。外側の見える家や財産や肩書だけでなく、自分を支えていた内面の価値や自信や誇りなどの鎧を脱ぎ捨てさせられて、**素の自分**になって初めて湧き上がる**利他の愛、お互いの〈いのち〉の尊さやありがたさに目覚める意識**である。坂本さんの著作から被災者の意識と不登校の親子の意識がつながっていることに気付かされた。

親から我が子に書いていただいた手紙の実物写真

へ
 東日本大震災から一年と六ヶ月…。時間がいい。ほわいたっているような気がするし、あの日のまま、時間が止まっているような気がします。
 自然の力はすごいよね、大地震と大津波は、誰のせいでもないのだけれど、お母さんは現実なんだけど、いまだにこの現状が信じられない時があります。
 震災の作文を去年は思い出したくないから書けないと言っていたけど、今年は書きあげた京、えらかったね。いやだと言っていたのを震災の時の京の気持ち、話すこと、聞くこともせず過ごしてしまったので、京の気持ちがわがわがして少しうれしかったです。
 京の大切な物がたくさんあった家が、大好きな雄勝の町が、あの津波でいっしょになくなって、そして、本当に、本当につらかったよね。お父さんは無事なんだろうかと、これからの生活はどうなるんだろうとが、い、い、い、い、い、不安にさせたよね。
 お父さんが無事で帰ってきてくれた時、「生きてくれた」うれしくて、みんなが見てたけり家族で抱き合ってたよね。いとこの家に住わせてもらって、家がある、電気

「感謝」というすればこの気持ちを伝える事ができるが、一緒に考えていこうね。
 「感謝」、この気持ちを忘れないでいこうね。
 「感謝」、京に感謝です。京と同じ気持ちです、たくさんの方に感謝です。
 お母さんは、京が生きていてくれて、元気に過ごしてくれるから今があります。
 あの大地震、大津波は忘れたくても忘れることができない出来事で、京もお母さんも生かされた者の一人です。津波で亡くなった方々に取って代わらないように、今を大切に過ごしてください。お母さんは京を不安にばかりさせてしまったけど、お母さんも京に負けないように全力で今を大切に過ごします。一緒に、前に、前に、進もうね!!
 京の笑顔が大好きです。

お母さん よし

●震災作文の実践の結果

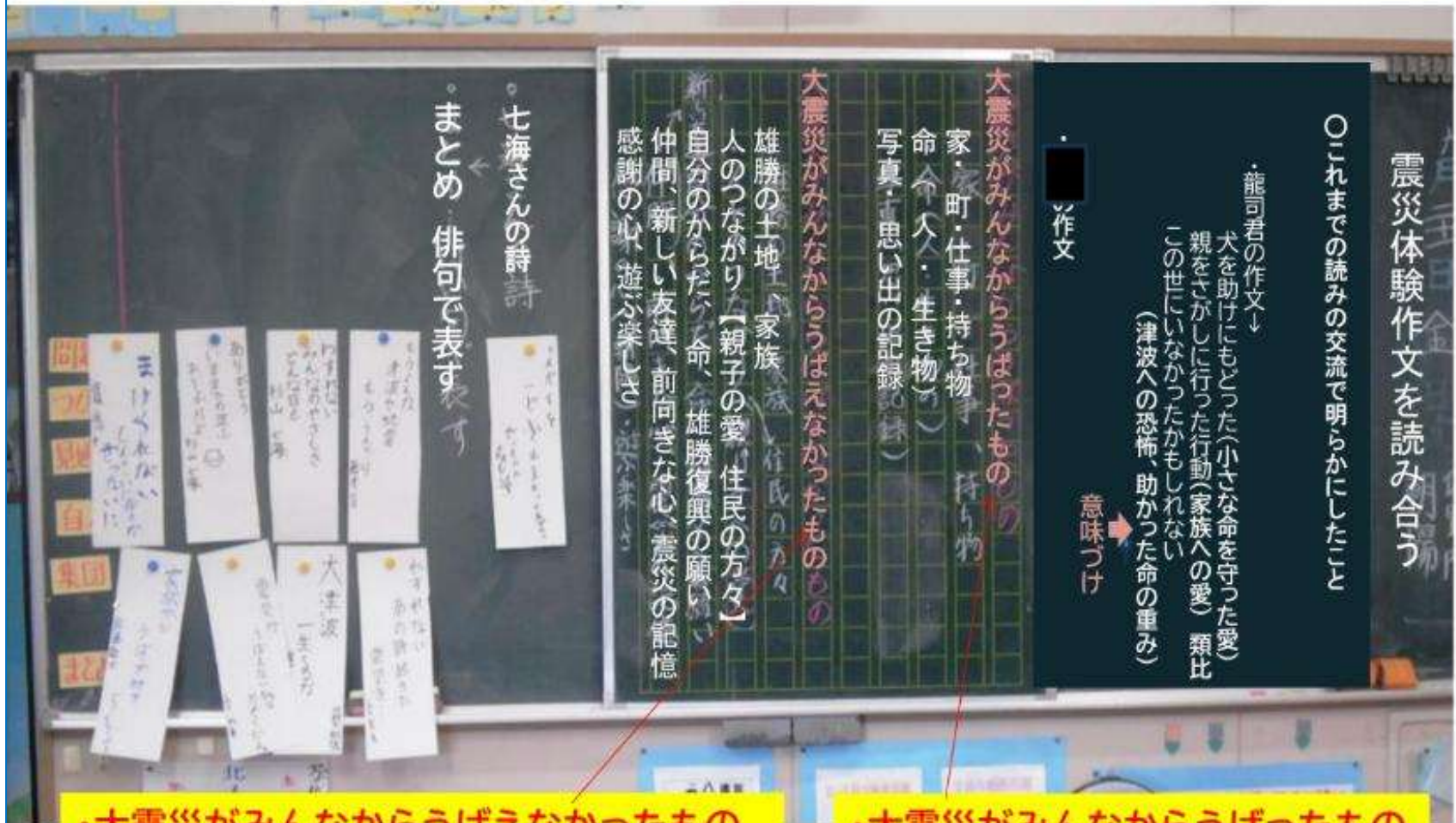
①子どもたちはお互いの震災体験を語り合い、聞き合うことを通して、辛さや喪失感が軽減されていく。同じ体験をした者同士だからこそ**分かり合える関係**ができる。こうして子ども同士の関係が**つながり・再構築**されていった。

②親と子の関係も作文と手紙の交換によって、辛さを**分かち合える関係**として**再構築**されていった。

③教師の私と子どもとの関係も、**子どもが自分自身の内面を学びの対象にし、教師の私は子どもの内面を教材化**することで、**すれ違った関係・ミスマッチの関係**から、学びを通した**応答の関係**を**再構築**することができた。

○こうして子ども同士、子どもと親、子どもと教師のそれぞれの関係が改善されて、**心のケアが促進されていった**。 ***つながり・関係性の回復(再構築)による心のケアの促進**

国語科：震災作文のまとめの授業



・大震災がみんなからうばえなかったもの

・大震災がみんなからうばったもの

震災によって過去の記憶まで奪われた感覚に陥ってしまうが、大震災がみんなから奪えなかったもの(雄勝の土地、家族、人とのつながり、親子の愛、命、自分のからだ、仲間、前向きな心、震災の記憶、感謝の心、遊ぶ楽しさ)を確認して、震災が奪えなかったものとして自分自身を支えている**肯定的な意思**が残っていることを再認識していった。この意思こそが前を向く力の源となるような気がした。

・不登校の子どもの場合は、このような授業をつくることで、辛さに共感できる**仲間との出会いと学び直し**によって、辛さの正体を明らかにするとともに、前を向く力が自分の中に存在することに気付くことが可能ではないでしょうか。

【作文の読みの交流後に、まとめとして作った五七五】

・わすれない みんなのやさしさ どんな日も

・ありがとう 今までの豆腐 おいしかったよ 七海

・大津波 一生来るな 雄勝にな

・家族から うばったものを とりもどそう 龍司

・友達を 一度でも守ってあげたい ぜったいに 凌

・震災が うばえないものは かぞくだよ

・わすれない あの日起きた しんさいを

・まけられない しんさいなんか ぜったいに

・もうくん な 津波や地震 もううんざり

凌は、津波で一学年下の幼馴染を亡くしている。凌の五七五には一番仲が良かった友達を守ってあげられなかった悔しさと同時に、次に新しくできた友達は絶対に守ってあげたいという二重の意味が込められている。このように解釈(意味づけ)して学級全体で共有した(虚構の作文指導)。こうして子どもたちは震災体験の対象化と意味づけの方法を学んでいく。その結果、七海の詩や後述する版画感想文を生み出していくことになる。

10歳の子の震災体験の対象化と意味づけ

●震災をただのマイナス体験で終わらせることなく、意味づけをしてプラス体験にすることで、今後の人生を歩む糧にすることができる。*ロゴセラピーで説明すると、状況は変えられないが、自分の態度は選ぶことができる(態度価値)。亡くなった幼馴染みの命に意味を与えることで悲しさを乗り越えて、前を向く力を得ていく。

桑山紀彦さん（医師）との出会い 2012年11月23日

123

前例のないケア的教育への挑戦！震災の傷をえぐるような実践をしていいのかという迷いや逡巡も一方では持っていた。



朝日新聞の記事を読み、名取市に会いに行く。



心理社会的ケアプログラムを学ぶ

筆者の「震災体験の対象化と意味づけ」に確信を得る。

津波の記憶向き合い克服を

東日本大震災から1年7カ月が過ぎ、心的外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しむ被災者が増えている。どんなケアが必要なのか。名取市で被災者の心のケアに取り組む心療内科医の桑山紀彦さん（40）に聞いた。

被災者の心のケアの現状はどうですか？

「震災後、私のクリニックには新たに約800人の被災者が来しました。PTSDを患える人は震災半年後ぐらいから増えています。気分が落ち込んだり、ささいなことでいら立って家族や友人と争ったりしてしまったり。かつては被災地には、いまだに足を踏み入れられない人もいます」

「長年、イランやカンボジアなどの紛争地や被災地で、子供の心のケアに取り組んできました。どんな不幸な経験でも、前向きなエネルギーに変えるためのサポートをします」

心療内科医の桑山紀彦さん



トをする。それも医師の仕事だと思いませんか？

「PTSDは『記憶の』と聞くと、子供には難しい。『記憶と向き合い』」

「被災した古里のジョウ」

経験語る場、学校に

くわやま・のりひこ 岐阜県高山市出身。1992年、山形大学医学部医学科を卒業。2008年、名取市に「東北国際クリニック」を開業。海外の紛争地などで医療支援をしながら、国内外に東日本大震災の被害を紹介している。40歳。

とことん

インタビュー

心理社会的ケアプログラムのジオラマ制作とその教育的意味

心のケアが進んがK子の事例 2012年12月



作品1 k子 震災前の自宅周辺



作品2 K子 住んでみたい新しい家と町

作品1: 震災前に住んでいた自宅と雄勝の町のジオラマ制作→制作しながら震災前に自分が持っていた願い、大切な物、自分を支えていたもの、その記憶を取り戻して自分の土台を再認識することができる。

○自分の土台となる記憶

- ・新山神社のお祭りに七海さんと行きました。
- ・誕生日に初華ちゃんとあそんだり出かけたりしました。
- ・夏やすみにいとこと遊んだ思い出がいっぱいあります。
- ・冬にのんちゃん(姉)と雪だるまをつくりました。
- ・家族で東京に旅行に行きました。
- ・家族で楽天のおうえんに100試合くらい行きました。

○さらに震災前の自宅と街並みを制作しながら語り合うことで、震災の記憶とゆるやかに向き合って、言葉で語り(対象化)、表現するようになる。

・白い家が、私が住んでいた上雄勝の家です。となりは倉庫でした。そのとなりはガソリンスタンドでした。今はがれき置き場になっています。すこし悲しいです。→ゆるやかに喪失感と向き合っている。

作品2: 未来の住んでみたい家と町のジオラマ制作→将来はこんなことをやってみたい、こんな暮らしをしてみたいという未来志向的な思考を取り戻すことができる「意思の再獲得」

○これは私が住みたいしょうらいの町です。私が一番気に入っているところは、Cゾーンのキラキラタワーです。おはじきがたおれながらもがんばりました。ゲーム学校はゲームのことを教わる学校です。

Aゾーンの池は伝説の池です。中に入ると長生きすると言われています。

Bゾーンには自分の家があります。となりはプール、向かい側は二つの温泉があります。

Dゾーンはゲーム学校と公園があります。私がアルバイトをしたい所はAゾーンのコンビニです。

ジオラマ制作と記憶を語り合う子どもたち

映像記録DVD「ぼくたちわたしたちが考える復興」から動画2分間



私の宝物 図工の版画の授業

2012年12月

【ジオラマ制作の実践の結果】： K子は、津波で雄勝の町が津波で流される場面を見ていて、その辛さや恐怖がトラウマとなつて、雄勝に行けなくなった子である。PTSDの回避の症状が見られた。そのK子が実に楽しそうに活動した。**友達と遊んだこと、家族と一緒に夏祭りの思い出などを語り合っている姿は笑顔にあふれていた。**津波前の記憶を呼び戻し自分の**土台としての記憶を取り戻す**ことで辛い体験を自分から切り離し、辛い記憶の支配から少しずつ解放されていき、心のケアが促進されていると理解できた。

・私の宝物→実践の目的:ジオラマ制作の後に導入した心のケアの実践である。

・震災前に住んでいた雄勝での暮らしの中で、**自分にとって大切な記憶や意味のある記憶を取り戻すための表現活動である。**

・A4版半分の小作品の制作である。

【心のケアが進んだK子の事例】

・構想段階の下絵では、初めは雄勝に建っていた自宅の絵を描いていたが、途中で下絵を変更して、家族4人を版画(右図)に表現した。

K子の家族は両親と二つ年上の姉と4人家族でいつも一緒に行動する仲のいい家族である。

(母親の手紙参照)

版画制作のプロセスで、**家族が自分にとって最も大切な宝物であると気づき、家族愛が自分の『土台』であると再認識できたのである。**

この表現活動によってほとんどの子どもが過去の記憶として家族との思い出を想起した。自分が過ごした時間と感情を想起し、**震災前に自分が持っていた願いと意思を想起し、再認識する。**この活動によって、K子が現在持っている津波への恐怖心や辛さを少しずつ自分から切り離して、**対象化することで、心のケアが促進**することを理解できた。

*対象化を、ロゴセラピーでは「自己距離化」と呼んでいる。



雄勝にいたころの私の宝物は、お父さん、お母さん、お姉ちゃんの家族です。今も同じです。私の一番の宝物である家族を版画にしました。

私の宝物

【他の子の宝物も紹介】

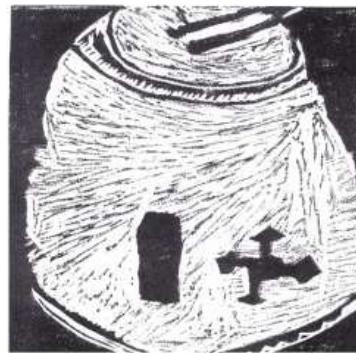
自分の宝物を表現することで、震災に遭う以前の自分を取り戻していく。「自分が大切にしていたもの、何を希望し、何を願っていたか」という『時と感情』を想起し、「自分の土台」を取り戻していくのである。どの子も熱中して取り組んだ。



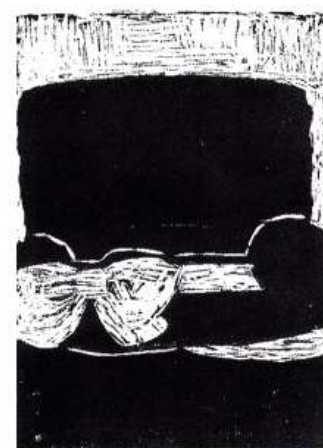
私の宝物の家族
(七海)



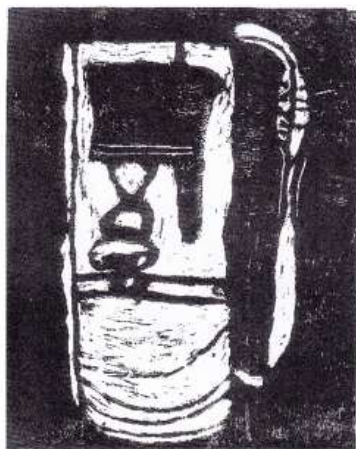
地区の獅子舞で演じた
獅子頭 (龍司)



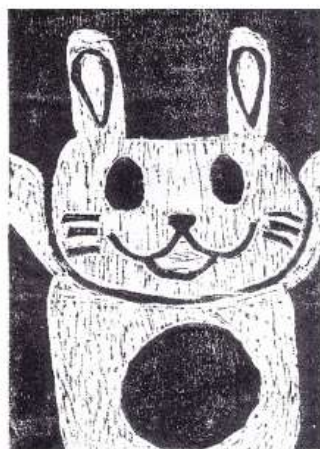
地区のお祭りでた
いた和太鼓



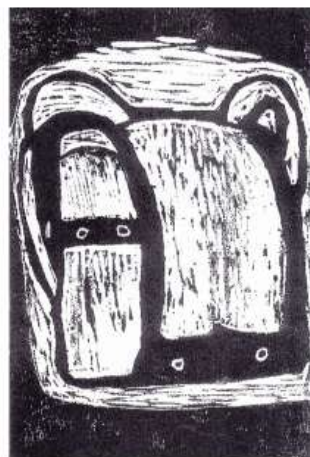
お母さんに買っても
らった帽子



お母さんに買ってもらっ
たランドセル(KN)



誕生日にもらったぬいぐるみ



お母さんに買ってもらっ
たランドセル



雄勝の自然

心のケアの授業は学級通信で親に伝え、安心させるために医師の指導の下で行っていることも伝えた。

独眼竜 NO. 24 雄勝小5年

●さんの雄勝の思い出は、家族です。家族が自分の土台になっています。家族を土台にして津波の恐怖感をさとし乗り越えることができます。



図工の時間に、震災前の雄勝の思い出と住んでいた新しい町と家(ジオラマ)を作りました。津波でとぎれてしまった過去の記憶(感情や思い出)を取り戻し、現在とつながり、未来への希望をもつためです。雄勝の町はなくなりましたが、自分の過去が失われたわけではありません。記憶に残っており、雄勝の暮らしは自分の土台です。この土台の上に自分の未来がつくられていきます。京さんは、最初は雄勝の記憶を思い出せませんでした。津波の恐怖が解けないためです。この活動を通して少しずつ思い出しています。無理をしないでゆるやかに向かい合えば、恐怖感の支配から解放されて、自由に雄勝にも行けるようになります。

(図工小・中学校で心のケアを行っている心療内科医の桑山紀彦先生のアドバイス)

さんの雄勝の思い出と住んでいた新しい町と家

○上雄勝にあった自宅と自宅周辺



白い家が、私が住んでいた上雄勝の家です。となりは食卓でした。そのとなりはガリンスランドでした。今はがれき置き場になっています。すこし悲しいです。

○私の宝物(家族)



雄勝に住んでいたころの私の宝物は、お父さん、お母さん、お姉ちゃんの家族です。今も同じです。家族は私の一番の宝物です。家族を頼りにしました。



これは私が住みたいという新しい町です。私が一番気に入っているところは、Cゾーンのキラキラタワーです。おはじきがたおれながらもがんばりました。ゲーム学校はゲームのことを教わる学校です。Aゾーンの池は伝説の池です。中に入ると長生きすると言われています。Bゾーンには自分の家があります。となりはプール、向かい側には二つの温泉があります。Dゾーンはゲーム学校と公園があります。私がアルバイトをしたAゾーンはAゾーンのコンビニです。

さんの雄勝の思い出 (2012年1月11日)

1. 新山神社のお祭りに七海さんといった。
2. 誕生日に初音ちゃんとおそんだけりかけたりした。
3. 夏やすみにいことおそんだけりかけたりした。
4. 冬ののんちゃん(姉)と雪だるまをつくった。
5. 家族で東京に旅行に行った。
6. 家族で東京のおうえんに100試合くらい行った。

雄勝での思い出はもっとあるはずですが、今はこれだけの思い出を思い出しています。京さんの場合、津波で家族の思い出が自分の土台になっています。無理をしないでゆっくりと向き合っていくことが、自分の土台を再構築し、津波の恐怖を乗り越えることができるでしょう。

津波の記憶向き合い克服を

心療内科医の桑山紀彦さん



くわやま・のりひこ 岐阜県高山市出身。1982年、山形大学医学部卒業。2009年、名古屋市に「東に国語クリニック」を開院。海外の研修などで医療支援をしながら、国内外に東日本大震災の被害を報告している。著書。

経験語る場、学校に

「経験語る場、学校に」は、被災地の子供たちが、自分の経験を語り、他の子供たちと共有し、互いに支え合える場です。学校は、子供たちが学び、成長する場所です。被災地の子供たちは、学校で学び、成長するだけでなく、他の子供たちと交流し、互いに支え合える場を求められています。学校は、子供たちが学び、成長する場所です。被災地の子供たちは、学校で学び、成長するだけでなく、他の子供たちと交流し、互いに支え合える場を求められています。

昨年11月から図工小・中学校で心のケアを行っている心療内科医の桑山紀彦先生のアドバイスを受けて、震災を体験した子ども達の心のケアを試みてきました。方法は教員が図工の授業で、できる内容でした。今年1月半ばに桑山先生が「図工小・中学校」での講演を終えて、雄勝小の5年生のジオラマ作品や震災の記録を書いた絵本を見に来てくれました。子ども達の活動にとても感心し、心のケアが進んでいるとお褒めをいただきました。



桑山先生と雄勝小5年生 昨年11月

震災の記録の絵本制作（2012年12月）

・ねらい… PTSDのケアのために、記憶を整理し、時系列に並べ変える。

・方法…震災当日から現在までの一年八か月間の行動と意思の時系列で、絵と文で表現する。

・時間区分は、津波当日、1週間まで、1か月まで、3か月まで、1年8か月の現在まで。見開き8ページ・全16ページ。



●実践の結果…どの子も夢中になって書き始める。

・1日2時間程度、10日間継続。清書は製本された絵本に。

・津波当日の出来事や避難所での抜け落ちた記憶をお互いに語り合い、確かめ合いながら「時系列」で書き進めていった。学級集団の力を借りて、震災の記憶とゆるやかに向き合うことになった。

・震災の記憶を語り合うこと、文章と絵で表現することによって、恐怖の記憶や辛い体験とゆるやかに向き合うことになり、記憶や体験の対象化と意味づけが促進されていった。

不登校の子が、自分の生い立ちから今日までの自分史を書く作業は、**学び直しと価値観の再構成**の場となるのではないかと思います。

東日本大震災おきる

私は東日本大震災の時、下雫鹿のヤナセがソリニースタンドの前を下校中でした。そこには伊藤君と山下初華さんと山下梨奈さんがいて、なるまさんの白をやってあずんでいました。すると、「おや〜。と大きな音がきこえて、大きな揺れに変わりました。揺れは長く地割れは大きく、古い家のガラスがたきんぷてきました。私達はこのあたりで、4人でかたまっていた。すると、ヤナセがソリニースタンドのおじさんが消防署までつれていってくれました。そして、消防署のとなり



車の中



前の方では...

母



の社会福祉協議会の人たちが地震の揺れが止まるまで、ずっといじょうにいてくれました。すると、消防署の方がサイレンがなり、消防車が来て出ていきました。そして揺れはおさまりました。副社長の令が学校へつれて行ってくれました。そして、お母さんが来てくれました。私は大泣きました。そして、それが雄勝小を見たのは最後でした。お母さんは家にどおり、ふんとして、おかし、冷東二はんをタシできて、妹と祖父をつれて、いこうとしました。父は、お母さんとふんな事を言っていたので、母と私で、「お母さん、お母さんはどことさわいで、どりました。そして父は谷トニをあげた所にひたしました。その夜、私は冷サバサの冷東二はんをたべて、一夜を過こしました。

総合学習 雄勝のホタテ養殖と漁業の復興について調べよう

まとめは個人新聞と版画制作 1月

もう一つの総合学習のまとめとして、木版画(A4版)制作を行った。これは共同制作への布石である。版画の彫りの技法である陰刻と陽刻を取得させて、共同制作への意欲を高めることをねらいとした。



ホタテの稚貝をすくうぼく



採苗網を結ぶ自分



ホタテ貝を持つわたし



作業する伊藤さん



ホタテの大きさにびっくり



採苗網をロープにくくりつける私



説明してくれる伊藤さん



仕分け籠に入れる自分



採苗網を海に入れる自分

総合学習「震災体験を記録しよう」学習のまとめ

木版画共同制作「希望の船」

2012年2～3月

震災の夜の美しい星空

津波に襲われる雄勝小学校校舎

未来に向かって船で進む子ども達

復興した町と笑顔の家族



高台から見ている町の人達

たき火にあたる被災者

救援に来た自衛隊

復活した獅子舞

復活したホタテ養殖

復活した雄勝法印神楽

90 × 180

絵画表現を通して、辛い記憶と向き合い、体験を《対象化》して心を整理し、《意味づけ》て未来へ続く「物語」を描くことで、前を向く力を獲得していく。自分と自分を取り巻く世界を目に見えるイメージで再構成し、表現し、過去から未来につながる物語を描くという「ナラティブ・セラピー」のような役割を絵画表現が果たしている。この絵画表現も筆者が語ってきた震災体験の《対象化》と《意味づけ》の実践例である。

共同木版画「希望の船」の解説

この木版画作品は、二〇一一年の三・一一の巨大津波を体験した、一〇歳の子どもたち九人で制作した共同木版画です。震災から約二年弱後の二〇一三年一月から三月にかけて制作しました。この作品を解説します。

画面左側は過去の場面であります。二〇一一年三月一日、巨大津波で雄勝の町が破壊される場面であります。雄勝小学校校舎に津波が押し寄せて、渦を巻いています。人が流されています。電柱がなぎ倒されています。瓦礫につかまっている人もいます。子どもたちは津波の恐ろしい記憶や辛い記憶と向き合って、津波の場面を描いたわけです。したがって黒い画面(陰刻)になっています。

画面右側は未来の姿です。復興した雄勝の町と笑顔の家族が描かれています。背後には大きな太陽が描かれています。太陽は人間にとって希望の象徴です。太陽から注がれる陽光は、家族を明るく照らしてくれています。未来は家族がみんな一緒に笑顔になりたいという願いや希望を描いたわけです。したがって過去の津波の場面とは対照的に、白い画面(陽刻)になっています。

画面の下側は、震災から二年間の雄勝町の復興の歩みであります。子どもたちが避難した避難所では暖房がなくて、焚き火をして体を温めました。亡くなった人の魂が天に昇っていききました。五日目に自衛隊の救援隊がやって来しました。その年のお正月には住民が獅子舞を復活させました。再開された雄勝湾のホタテ養殖。さらに住民が復活させた雄勝法印神楽という順序で時系列で描いています。

中央の船は現在の場面です。過去と未来の狭間にいる、現在の自分たちの姿を描いています。津波の海からサン・ファン・バプティスタ号に乗って空に飛び上がっています。津波から逃れた自分たちの姿です。津波は子どもたちにとって、恐ろしく、そして辛い記憶です。したがって、船の左半分は黒く描いています。船の右半分は明るく描いています。この船の姿は、辛い過去の記憶を抱えながらも未来に向かって、いる自分たちの姿です。絶望と希望という矛盾した感情や葛藤を表現しているという意味づけることができます。子どもたちが乗った船は、希望の象徴である太陽に照らされて、未来に向かって進んでいくのです。

(記:二〇一三年三月 担任 徳水博志)

映像記録DVD ぼくたちわたしたちが考える復興から版画制作を8分間

動画はどちらか音が出るほうを選ぶ、動作確認で9:30

かなさんは新しい街



【版后感想文1】龍司

この『希望の船』は、最初はいやだったけど、雄勝のことを思い出してやってみたら、うまくやれました。時にはふざけたりあきたりしたけど、でも三月一九日に彫りができてよかったです。また機会があったら、やりたくなけれどやりたいです。(葛藤・立ち位置)

「これからもこの『希望の船』が太陽に向かって進むように、前へ、前へ、ちよつとずつでもいいから進んでいけたらいいなあと思います。雄勝にいたころの思い出や友達、雄勝の伝統、ふるさと津波にのみこまれた人、雄勝小学校、家族、宝物がすべて流されたけど、これからも死んだ人の代わりに、生き続けたいです。(死んだ人の分まで生きるという意味づけ) 3月19日



○「また機会があったら、やりたくないけどやりたいです」

・この感想文からは龍司の苦悩や葛藤がよく伝わってくる。版画制作を通して自分を**対象化**し、**自分の立ち位置を確認できた**のだろう。龍司の家庭はまだ自宅再建の見通しが立たない時期であった。その家庭の状況が心の揺れ動きに反映している。「やりたくないけどやりたいです」とは、まだ前を向く心境ではないが、それでも前を向かなくてはならないという揺れ動く健気な思いが伝わってくる。

○「これからもこの『希望の船』が太陽に向かって進むように、前へ、前へ、ちよつとずつでもいいから、進んでいけたらいいなあと思います。」

・太陽を未来への希望と意味づけていることが分かるし、太陽に向かって進む船と自分の姿を重ねている。辛くても前へ前へ、ちよつとずつでもいいので、歩んでいきたいという大変健気な思いが伝わってくる。

○「雄勝にいたころの思い出や友達、雄勝の伝統、ふるさと、津波にのみこまれた人、雄勝小学校、家族、宝物がすべて流されたけど」・**けどは接続助詞**

・大切な宝物をすべて流されて辛くて悲しい「けど」という表現の工夫から、現実を受け入れて、震災を人生の一部として受け入れて、震災と折り合いをつけているように読める。

○「死んだ人の代わりに生き続けたいです」

・龍司は自分の親兄弟を亡くしたわけではないが、津波で亡くなった人全体に思いを馳せて、その死を悼むとともに、亡くなった人の命を無駄にせず、亡くなった人の命の分まで生き続けたいと願っている。自分と自分を取り巻く物事(津波で亡くなった命・宝物・すべて)を、「けど」という二文字で意味づけて(人間観・世界観を創造)、前を向く力を得ている。

・**ロコセラービー**で説明すると、被災という事実は変わりはしないが、被災の意味づけすなわち被災への態度を変えることで、前を向くことが可能になる。「態度価値」の創造。

・龍司は、半年前の震災作文では、家族が死んだかもしれないという境遇を一晚体験したことで、祖父の車に乗らなかつたらこの世にいなかったかもしれないという心境を書いていた。龍司の意識の中で、**震災体験の意味をどのように問う力を身に付けて、どのように意味けるのだろうか**、と問題提起を行ったが、半年間の震災と向き合う学習(作文や俳句の表現・読みの交流・シオラマ制作と語り合い・絵本や版画の制作)によって、つまり自分の内面を学びの対象とする探求学習の中で、私が意味を問う発問を発したり表現活動教材を配列したりすることで、**自己対象化と意味づける力を獲得できた**と考える。

・もう一つは、同時並行で実施した、地域復興を学ぶ総合学習で、漁業の復興に立ち上がった伊藤さんら漁師さんと出会っている。伊藤さんの津波への**態度意味づけ**は、子どもにとって震災を意味づけるモデルとなったと考えられる。

【感想文2】

七海

私は、あの三・一一の暗い事と明る
い未来の事を、そして船を彫りまし
た。私達が体験した三・一一からに
けず前へ進んで行くという思いで、
この共同制作の版画にしてみました。
後世に伝えて行かなくてはならな
いこの事を版画にして、何年後、何
十年後と時がたっても、この版画を
見て、思い出してもらおうことや、後世
に伝えていくことができるのではない
でしょうか。そして、私達もわすれ
かけている時に版画を見て、その震
災を思い出せると思います。

私はこの共同制作『希望の船』を
制作してよかったなあと思います。
私はもう転校しますが、転校した学
校でできた友達にも、この『希望の
船』のことを教えようと思います。私
の大切な思い出です。

震災という現実から目をそむけないで、
乗り越えて行くという強い意志と語り
継ぐという強い決意を表明し、マイナ
ス体験をプラス体験として意味づけてい
る。



西郷文芸学で感想文の構成を説明



○三・一一から逃げずに……この共同制作の版
画に挑みました。

・図工が得意な七海は、この共同制作でも中心なつて活
動した。「暗い事」とは、津波被災であり、「明るい事」と
は未来のイメージである。

・三・一一から逃げずに……版画にしてみましたという
表現には、震災から目を背けずに正面から向き合つて
突き進むという、非常に前向きな強い意思が表現され
ている。漁師の伊藤さんから学んでいると思われるし、
生活環境の背景としては、震災二年目にしては早めの
自宅再建があると考えられる。

○転校するとは、石巻市内陸部に自宅再建を果たした
という意味であり、経済的に恵まれている。他の子の家
はまだ当分、仮設住宅暮らしである。

○後世に伝えていくことができるのではない
でしょうか。

・七海は版画制作によつて震災の記憶を白黒の形象に
して心に刻み付け、後世に語り継いでいく強い決意を
表明している。詩「わたしはわすれない」から意味づけ
がさらに進んでいる。未来の人の命を守るために語り
継ぐんだという強い決意を述べることで、自分の被災
体験に意味を与えている。自分の役割を自覚して未来
の人とつながっている。こうして震災体験を対象化し、
意味づけて、前を向く力を獲得している。

*ロゴセラピーで説明すると「態度価値」
を創造することで前を向く力を獲得して
いる。

*桑山医師の「心理社会的ケアプログラ
ム」で説明すれば、マイナからゼロへ、
ゼロからプラスへ、「意志の再獲得」を果
たしたと言える。

*震災作文や版画制作等を通して、子
どもたちは辛い記憶と向き合い、震災を
人生の一部として引き受けて、心を整理し
過去から未来につながる「物語」を描く
ことで前を向こうとしている。ナラティブ
セラピーのような効果があった。

わたしはわすれない

五年 七海

わたしはわすれない
地鳴りがして

おびえ からだがふるえて
しゃがみこんだことを

わたしはわすれない
ガソリンスタンドのおじさんが
走ってきて
助けてくれたことを

わたしはわすれない
豆腐屋のおじちゃんが
みんなを避難させて
自分だけは津波に流されたことを

わたしはわすれない
豆腐屋のおじちゃんが
ふいていたラッパの音を

わたしはわすれない
誕生日にお母さんにもらった
大切なネックレスを
流されたことを

わたしはわすれない
家族 友達 わたしが
写っていた思い出の写真を
流されたことを

わたしはわすれない
自衛隊の車に乗って
こわれた北上川の横を走り
雄勝から出てきたことを

私はわすれない
避難所でいただいた
スूपのあつたかさと
おにぎりの味を

わたしはわすれない
飯野川中の避難所で遊んでくれた
お姉さんたちの
笑顔とあたたかさを

わたしはわすれない
こわされた家を
流された命を
助けられた恩を
人のあたたかさを
わたしはわすれない
大震災の記憶の
すべてを

(記 二〇二二年九月二〇日)

●震災とは七海にとって何だったのか、10歳の子どもながら自分と自分を取り巻く世界に起きた震災というものごとの意味を問うて、意味づけている。津波が奪ったものがある反面、津波でも奪われなかった記憶があること。その自分にとって拠り所となっている日常の情景の一つひとつを心に刻み付け、その記憶を絶対に忘れないという固い決意と力強く歩む決意を述べている。「わたしはわすれない」を類比するたびに、語り手のわたしの意志がだんだん強くなっていく効果(イメージの筋)がある。表現の工夫(虚構の方法)は、小学生でも使える「類比」と「倒置法」を用いている。この文芸創造によって、震災を意味づけて、10歳ながら震災に立ち向かう思想を創造したと言える。後述する版画感想文(2023年3月19日)では、意味づけが深化し、震災を後世に語り継ぐ決意を述べている。

*ロゴセラピーの用語で説明すると、七海は「態度価値」を創造している。態度価値では、困難な状況や避けられない苦難に直面したときでも、苦難に意味を見出すことで精神的苦痛を克服して前を向くことが可能になる。ロゴセラピーとは日本語訳「夜と霧」の作者、ビクトール・フランクルが提唱した実存的心理療法。人は自分の「生きる意味」を見出すことで心の回復を図るという考えに基づいて、創造価値、体験価値、態度価値を創造することで、人生の意味を見出すことができるとする。

本日の報告のまとめ

スライド 15番目より抜粋

私の被災児の心のケアの方法

不登校の子の心のケアに生かす

(3)「心のケア」の授業実践は、具体的にはどのように行ったのか。

①安全安心の確保と親子の関係の回復

②辛さに共感できる学級集団での語り合い

③震災体験の対象化と意味づけ

④地域復興を学び参加することで、地域とのつながりを回復し、前を向く力を獲得

キーワード：震災体験の対象化と意味づけ、
つながり(関係性)の回復・再構築

(3)不登校の子どもの心のケアの教育実践は具体的にはどうあればいいのか。

①親の役割・「ケアの心」は子ども中心(広木先生の著書に詳しく例示)

【私からの提案】

②辛さに共感できる仲間との出会い(広木先生)

③不登校体験を対象化し意味づける学びの場の提供

④能力主義的教育の価値と人間関係を相対化し、多様な生き方や人間尊重の価値観に触れる学び直し(価値観の再構成)の場の提供

広木克行先生著「不登校の『心の傷』が癒えるとは」と坂本則子先生著「我が子が不登校という問い」と出会って、私の復興教育の「心のケア」は、不登校の子どもの心のケアに生かすことができるのではないかという仮説のようなものを提案してきました。不登校にお取り組みの関係者の皆さん、そして不登校に苦しんでいる当事者の皆さんにとって、何かのお役に立てれば幸いです。



2000年頃（救出）

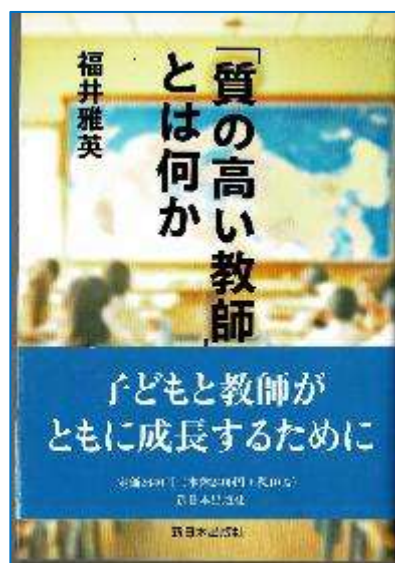
石田徹也

この作品は、画面には描かれてはいないが、手前に助けを求めている子ども（自分）がおり、その子どもとの視点から描かれている。先に紹介した二点の絵画では、苦悶に満ちた石田徹也の自我像が描かれていたが、それとは異なり、この作品では、自分を助けようと手を差し伸べてくれている消防士の姿に託して、自分の心の叫びを表現しているかのようだ。消防士の表情は、「こっちにおいて」と言っているかのように、おだやかな優しさをたたえている。足元には先に救出された幼児たちが一緒に手を差し伸べてくれている。**この消防士の姿こそ、不登校児が求める大人の姿のように見えてしまう。**様々な解釈ができる作品だが、不登校の子どもたちの心の叫びを表現した作品でもあると解釈することができる。（徳水）

不登校理解に役立った文献



筆者の復興教育に関する文献



徳水論文
「復興教育から何を継承するのか」
―地域に根ざす教育への展望―